



近世名家書畫談二編

二





近世名家書畫談二編卷之三目次

- 本朝名山大雅畫小真の幽趣哉得る事
- 唐帖中日本書釋文并考
- 崎陽客江戸の花扇小詩哉寄る事
- 僧月儼が畫事
- 近世江戸書畫會原始并落款
- 盤珪禪師の逸事
- 小澤蘆菴翁の傳
- 僧涌蓮の逸事
- 勝間龍水の傳





○梅里山人の逸事

○白石先生の書再収奇遇の事

○熊澤伯繼藤樹先生小謁状と事 附真跡短冊

○仁齋先生櫻隱の號 附梨本翁

○大石良雄二武畫讚 并子息童名

附清人四十七士の義烈状稱譽を事

○赤穂義士閑居替名 并大高去より發句

近世名家書畫談二編卷之三

雲煙子 安西於菟編次

本朝名山大雅畫小真の幽趣状得る事

此邦南宗畫の開創と稱をべきハ祇南海柳里恭等あり

右二先生の目當とせしきハ黄蘗諸師の書画あり近

世彭百川大雅堂出て南宗大成を大雅ハ普く海内の絶

境小游歴一其幽趣状探るふいある故小富士淺間白山

立山熊野等の景状造るその皆意外の奇態あり洵小

此人出てより名山大澤真の面目状生一多りといつて一

その平生の墨法筆意種々小變化して一定なき是皆



古人の妙處、或斟酌して其跡、或踏襲せん、或畫く畫家の習氣、或脱して自ら一家、或為す者あり、本朝逸格の始祖として愧ぶるるもと、或素嗣祭先生の説まことに志すあり、頼山陽先生墨竹小題して云、大雅山人墨竹、題臨溪影、更長五字、有霞樵之款、西谷生携来、索鑒曰、觀者皆以為非真也、余曰、真也、山人書畫、可謂醜恠矣、而醜中含妍、恠中藏正、世之贗手、能贗其醜與恠、而不能為其妍與正、試以此一觀、と、実は大雅の書画、或半鑑してハ觀ること、或ハ庸眼ハ醜恠のみ、或妍正風韻を鑒者ハ何らさるバ觀るべしきなり

因ふ云、大雅翁自刻の印、或前身相馬方九臯と、鑄られ、或多るあり、是ハ形似、或神髓ハ故事とするの意、或陳簡齋の句ハて列子ハ出る故事ハ人の姓名九方臯と、或べき、或誤り、或方九臯ハ作りしなり、或其ハ用ひて終身改免らさるふて、或其人の胸襟豪放ハ、或小足と或人云へり

唐帖中日本書釋文并考

陳元瑞玉煙堂董其昌戲鴻堂帖中、或出せ日本書と、或記せるその何人の書と、或其志ハ人稀ハて廣澤翁と、或未だ考へむといひ讀むべき字ありといひ、予今松下見



林翁の説小付て釋文並小考附して法帖好む人乃  
為小忌まて越ひる也

暮春遊施無畏寺。翫半落花。絕句為韻。

鬱檀一首

落花委地亦殘枝。如有如空意始知。何似道場檀  
越老。年頽白髮半頭時。

三月盡日。於施無畏寺即事。絕句為體。

左拾遺一首

艷陽三月今日盡。白首拾遺感懷催。欲以危身期  
後會。明春誰定見花開。扶醉走筆。不避調聲。

以上二枚。此皇子手蹟臨之也。

日本草書。如唐人學二王筆迹。薛嗣昌

晉陽張誠一嘗覽 子雍題

右詩二首並小跋語十二字まで日本書なり今按る小  
此皇子ハ醍醐天皇第十六皇子兼明親王なり御母ハ  
藤原朝臣淑姬參議管根の女親王二品中務卿ふて  
前中書王と號しこま嘗て小野宮右大臣實賴朝臣  
が為小忌まて嵯峨の龜山小隱る詩文音樂小長し又  
書成能し世小老君子の曲成傳ふ此親王の作りぬ小  
夏あり初親王龜山小居也此北山小ある夏の施無畏



寺始名八觀音寺しんじなはつくわんおんじして淑姫しゆけい葬瘞そうさいの地なる故小親王こしんおうハ  
當寺とうじの檀越だんごつあり志しづくこゝ小経歴こけいれき多おほまよし所謂いふやう鬱うつ  
檀だんハ親王しんおう自らみづか稱なづけり左拾遺さしゆいハ官名くわんめい本朝ほんてうの侍從しじゆう  
小當こたうまりこれ親王しんおう同時どうじ風騷ふうそうの士しなりん故ゆゑ小こままりり左  
拾遺しゆいが詩し紙し書しよしし海うみふあるべ但たゞ跋語はくご小此皇子ここのみこ  
手跡てしよ臨りん之これ也なりといはまさば何人なにひとハ皇子みこの御書ごしよ紙し臨摹りんませし  
まのと見みるあり

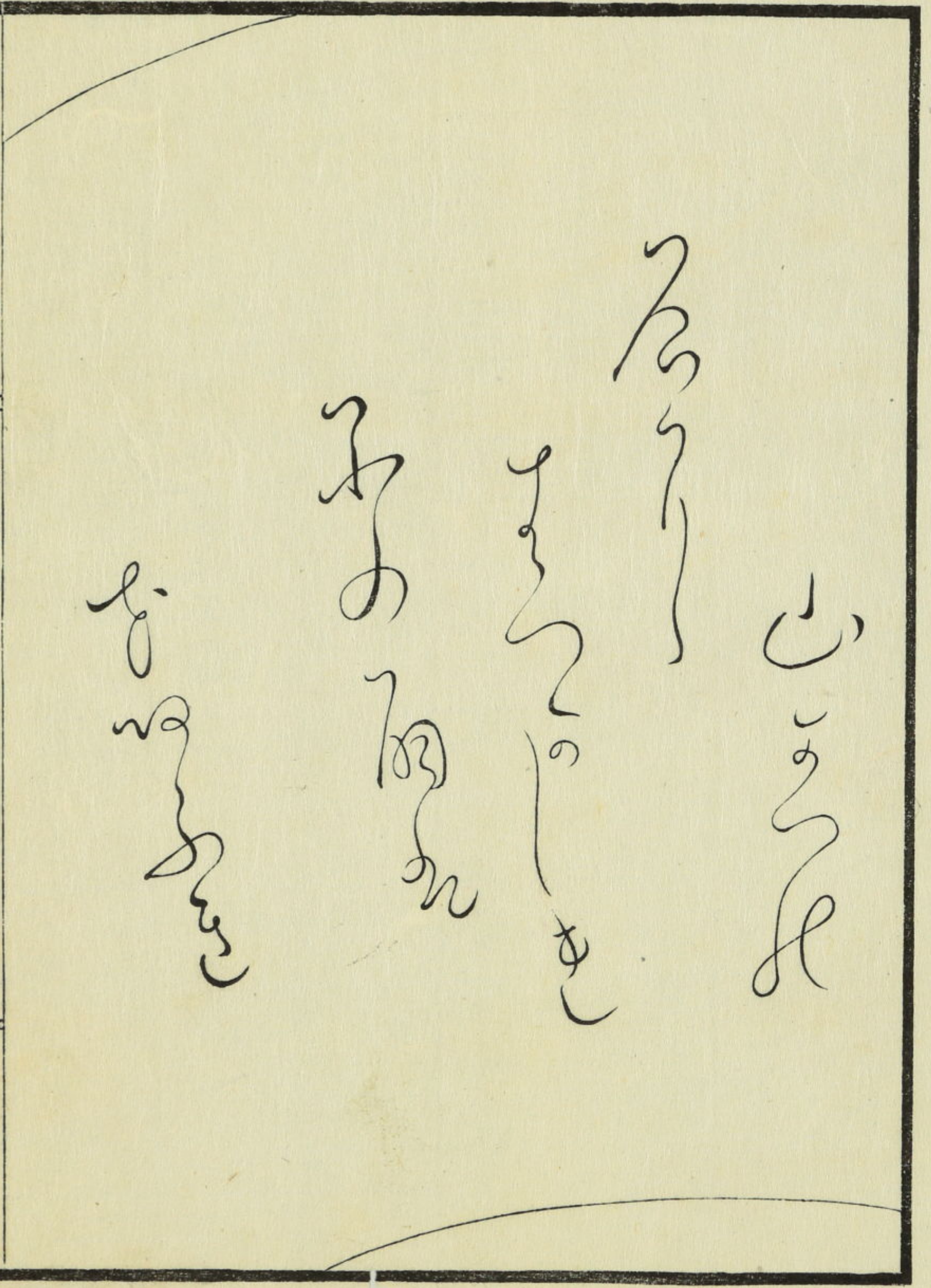
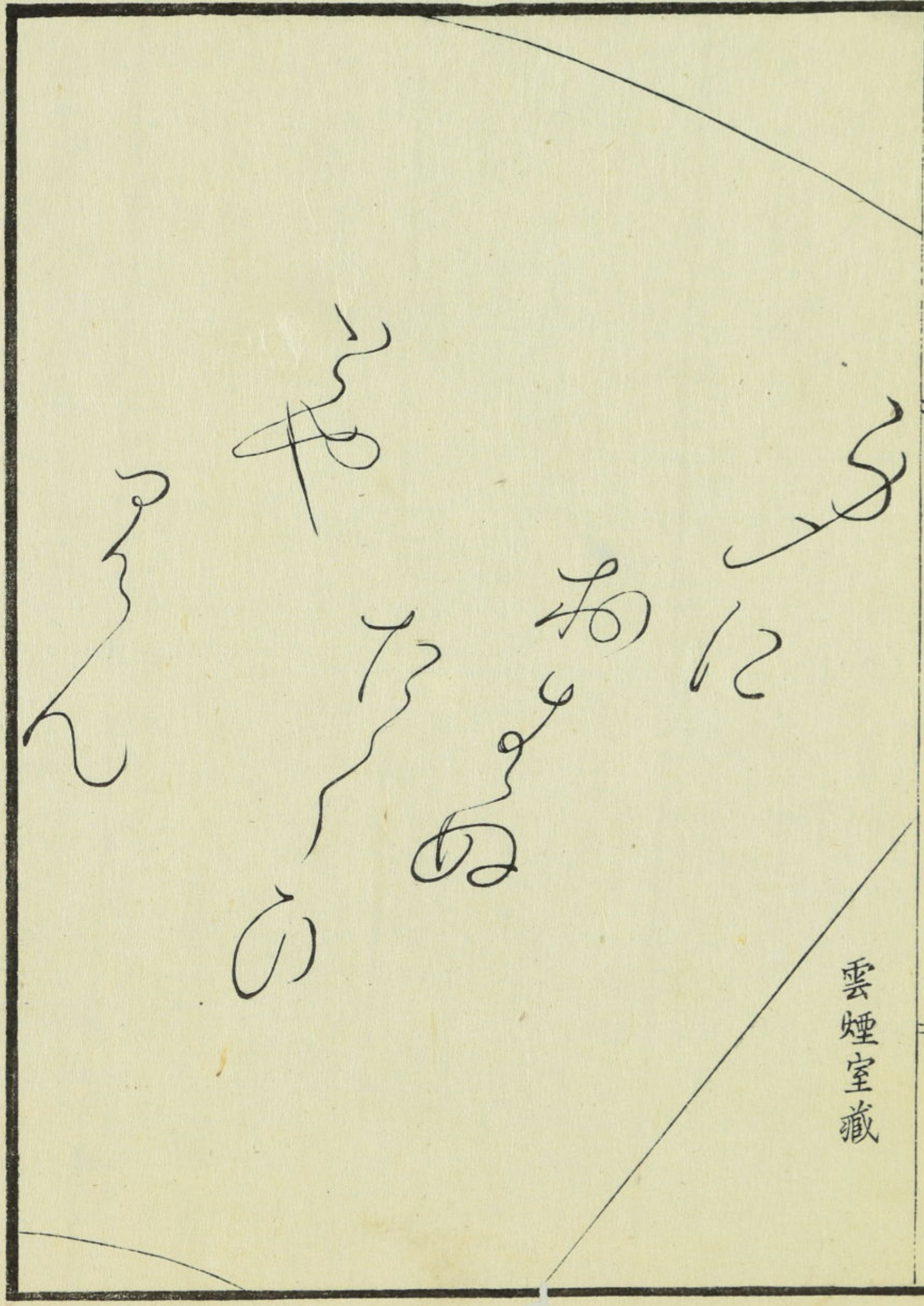
崎陽客江戸の花扇さかやのくわ小詩紙こしし寄よること

瀧澤瑣吉子たきざわさきちこが記しふ二十年にじゅうねん前まへ寛政二くわんせいに北里きたり五明楼ごめいろうなる花扇はなあふぎ  
といひし遊女うきよめ老母らうぼ小孝行ここうかうありしこと其事そのこと紙し板いたといふこと卷まき小

賣うるもの何なにのもの予よのころハ弱冠じやくくわんなりしハそのものこころを  
聞きくものら耳の底そこハと免めんざりしハ友人ゆうじん南野なんやめめ嘆賞たんしょう乃  
あまりあまり彼孝女かうにょ傳でんと題だいせる小紙し二頁にげつ紙し花はなししり志すること小  
この比このひの商船しょうせん費晴湖へいこ崎陽さかやハ何なにのもの孝娼かうやうの事こと紙し傳聞でんぶん  
て感称かんしょうハ漫まんハ是こゝ紙し賛さんハ多おほく詩草しそう紙しあること人ひと花はな奔ほんせし  
ハ南野なんやめめハ又是また紙しといて表装ひょうさうハ彼花扇かのあふぎが艶筒えんとう間まさ  
小帖こてうの末すえ小このものハつ煙花えんげ三絶さんせつと題だいしし今いま小秘ひ花はなせら  
ままハ中畧ちゆうりやく又云またいふ彼遊女かのうきよめハ心こゝろさること風流ふうりゆうハハ書しよ紙しよくせ  
とぞとここまま紙しハ世人せじんよく志しめどその孝行かうかうハハありてハハまま  
知らしらずるもの何なにのもの予よハその風流ふうりゆうと能書のうしよ紙し取とらん



雲煙室藏





孝の一字小愛るのこ中畧媚哉献く欲く哉驚くまの孝を  
えて賞せしむ其名異國いこく小之聞きこへ多おほく久ひさしこ未い曾そ有うの  
美談びだんのいふや云い下畧費氏ひがしが詩左小記さしを

綽約せつやく氷姿似紫雲。清歌妙舞更能文。脩行孝道無  
雙侶。聲譽京華得上聞。  
名擅青樓第一人。天生百藝妙通神。憐余長作天  
涯客。碧海蒼茫欲問津。

江戸有名妓花扇者。美有姿容。涉獵文藝。家有  
老親。更能曲盡孝道。余來崎陽十餘年矣。嬌態  
靜美。風流跌宕之輩。雖不乏人。獨難其孝而能

文也。余聞之。不勝神往。因賦二絕郵寄云。

苔溪 費晴湖 □ □

按お此花扇ここの東江源麟とうかうげんの弟子でし小こて詩歌しをか書  
多おほく紙し志しづく見みること何なにりこ小こ又清人せいじん姚中やうちゆうが詩しを  
得えるま左小記さしを又花扇このが真跡まじきを影寫えいしやして載のるまは  
其孝子この并なら小能書こなる紙し取とるまり彼かが容色ようしきの如ごとくは  
年とし去いること五十餘歲ごじゅうご予よが未生いせい以前の事いぜんをまばその  
くし紙し知しること何なにりこ

伊人道阻長。邦媛湖清揚。國色弥間雅。神娥羨淡  
粧。花羞王氏美。扇詠婕妤章。莫謂東都遠。崎陽下



葦航。

原書誤以  
都為湖

戊申冬日。長崎客館題。寄江湖花扇美人。五律

一章 古寞 姚中一□□

あしぎ合歌仙三十二番

勝左

遊女花扇

忍（よも）かきふて見（み）春の侍（さむらい）ぬ秋の夜の月

右

三島景雄

河（か）のふりか（か）る月の影（かげ）きよ（き）綱（つな）ひきさ（き）る舟（ふね）も（も）ま（ま）り

又石山寺（いしやま）鳴琴（なる）の二字（にじ）越書（え）て納（な）め（め）る此額（このがく）越源（えん）氏の間の  
上（かみ）の（こ）る小掛（こかけ）あるとぞんある人の所為（ところゝ）と覚（しる）へあり

僧月儼（そうげつげん）が畫事

伊勢寂照寺僧月儼（いせじやくしやうじそうげつげん）が画識者其格（そのかく）の陋（ろ）を議（ぎ）するとの共  
元来北宗法（げんらいほくしゆうほう）より出（い）て唐宋（たうそう）以来南宗（なんしゆう）小比（こひ）してハ格卑（かくひ）と  
文士の云（い）ふ（ふ）あり尤同時應（おとよ）奉（ほう）吳（ご）春風（しゆんぷう）致（ち）ありとの共（とも）此輩（こゝゐ）  
ハ意中（いしゆう）小趣（せうすゐ）越得（え）ざる（ば）筆（ふで）を下（くだ）さ（さ）る（が）故（ゆゑ）小畫（せうが）く（ま）悠（ゆう）然（ぜん）  
餘地（よち）ありて風致（ふうち）越兼備（えんび）せり月仙（げつせん）ハ紙絹（しけん）越見（み）ま（ま）バ瀟（せう）瀟（せう）と  
して揮毫（きごう）疾速（しつそく）あり又傍（たが）ら題辞（だいじ）ふ（え）及（およ）び頗（も）る（と）鑿（さく）賞（しやう）家の  
眼（め）小（こ）の（あ）り（て）ふ（か）て文人輩（ぶんじんばい）南宗（なんしゆう）の大雅（たいが）蕪邨（ぶせん）越以（も）て相配（あひあ）  
比（ひ）一格卑（かくひ）と（し）論（ろん）越發（はつ）ま（ま）是（こゝ）ハ天然（てんぜん）の品格（ひんかく）ありて大雅（たいが）  
蕪邨（ぶせん）ハ神逸（しんいつ）の場（ば）あり是（こゝ）ハ一犬（いつけん）の唾（きよ）萬（まん）犬（けん）傳（でん）ふ（の）を（ひ）る



月仙哉彼南宗輩ふくくべて陋むるふ至るべし何ぞ餘の畫家といひくく目まどくや廣澤先生の書哉雪山ふ比まどく如く志るまどく廣澤の書月仙が畫哉等閑ふ評まどく此格又凡筆の乃くまどくあどくなるなり

按るふ月仙年々千金の潤筆哉得ると共晚年山門哉建之佛殿哉修造一經疏哉集め其餘哉以て貧民哉故云中年世人貧僧と心得てその画哉陋むるその又畫の世間ふ多き故ある人月仙が人物哉貧民乞人の形容ふ似多りと是形ち哉評まどくまどく毀ふて鑒識ふハ何くも月仙が人物の簡なるハ仙釋の意なり

默契して鄙俚の俗習ふ漆るまどく其畫哉見て其人哉知るまどくあ

近世江戸書畫會原始并落款

杏花園主人近世書畫會ふ宴集まどくまどくの畫哉卷とあり表名二水七画と題し序ふ其人名哉記し跋ふ所名時日哉記まどく如左

画人七名

雲烟室藏

- 芙蓉 梅溪 幹 舜瑛
- 文晁 南湖 紫山



近世所謂畫會者從此始也

文正 庚午 冬友

遠樓散人

梅 鈴木氏

竹 鋪木氏

美善堂

梅溪寫

山水 文晁妻

竹 谷氏女志夫子 繁堂妻

幹

蝶

山水 谷氏

壬子正月翠筆於

席上文晁

拂子 春木氏

蓮 宋氏紫厚子

南湖

子心

右柳橋萬屋宴集。畫人席上所題。集以為卷。時寬政四年壬子。春正月十七日也。

杏花園 □□



盤珪禪師の逸事

師名永琢播州網干の人十二歳の時儒家の大學明德  
章賦講よむ賦聞心小疑ふ爰ありてこをより深く直指  
の宗賦志く上難髪して雲甫愚堂了菴迢元等の数師  
小参して遂小悟入をふ不生賦よるる

さう向心を清き水鏡色づりきまも垢つきゆき  
とよくころの垢を離きありと云屋一又誹句小

草よ木よ汝小志免をさ乃露

是又悟道發明の一詠あり栢原捨女ハ誹諧小名あり  
夫の死後此師乃法門小入貞閑尼と云より一禪師一とを

和州吉野小ありき一時里民の為小曰挽歌世首賦作り  
て何と一と人の知る要ありま結制の時僧徒数百人  
来集一居多り一其中小賊僧ありて誰ハ銀子賦失  
ひ何某を衣服賦盗まき一ちと毎日紛失物ありて難儀  
小及び一が後小賊賦あせる僧大既小知まらまバ衆僧一  
統小禪師小訟て賊僧賦追放せんこと賦歎ひまら小禪師  
聞届くそそのま捨置まき一六数日の後衆僧又此子賦  
禪師小訴う小猶を其まをて捨置まき一如此事三四  
度小及びて猶そのまをありらまバ衆僧大小腹賦立若  
賊僧賦追小事ありまバ衆僧一人を殘らま退散ま屋



しといひし師笑ひて退散し多くハ勝手多ふ悟道  
善行の僧ハ教ふ及ぶ此結制を左様なる悪心の者  
狐教き一とさん為なまばあどり悪僧あくそう狐きより追放おしなげまき  
といまきししを衆僧しゆそう大おほ感かんト服ふくぬ彼賊僧かのそくそうも是こゝ狐  
傳つた一聞きて大おほ開悟かいぶつ一座中ざちゆう出でて賊やく狐きをせし事共こと狐  
ふつら懺悔ざんげしと前まへ非ひ狐き改かへ徳行とくぎやう堅固けんこの僧そうとありて  
後うしろ世よ名な狐きつとととを

小澤蘆菴翁の傳

蘆菴翁通称ハ帶刀尾州の産なり和歌ハ始免冷泉為村  
卿乃門人ありし故ありて破門たふらさましつら蘆菴あそう一時小歌體せうかたい

并な小書風せうしよふうとを小變せうへんとて一家いけ狐きをせし故卿せうけいもを蘆菴あそう中ちゆう  
我われ調てう狐き守しゆり居ゐき者もの小何せうならむと内感ないかんありしと何某なにかの宮みや  
久ひさく芦菴あそうが和歌わが小長せうトぬること狐ききうう知しり及およぶま毎  
度たび御使ごしして召めいまはま共固きよくく辞ことして参まゐりて隠者いんしやのこと殊  
小老人せうらじんをまきバ風雅ふうがのことよ此方こゝ呼よむことも礼れい狐き失しふ小似  
多おほまきバ来きらざるも道理道理ありことありしを尋たづねね（まきとを  
太秦たづまの草菴くさそう一ひとと訪たづねを多おほまきし小芦菴せうそうもありあつて  
始はじめて沙目見さめみ一ひと中ちゆう上かみ其翬しゆ日宮ひみや一ひと沙禮さらい出でてそまより折してハ  
宮みや一ひと系けい上かみせりしと世上じやうじやうの俗人しやくじん肩かた狐き聳さかしし富豪ふごうの家いへ小属せうぞく  
一ひと魚いさなつつひ侍しやうよるとハ雲泥うんぬいありて近世きんせい小称せうしし人ひと品しんあり又



宮小元さきまの尊貴城風雅の多き小屈しつゝまひて三里  
小近き雲城尋訪ハせし商人こと古人の風ありてとありと  
き沙心なきありたり

又丙午のとり芦菴よき箏城求免つてとらう弾試る小  
姿小元似む其音さやうあまふそのまも樂人某小見せし  
小樂人を弾見ると誠小響ありく是古き器とてまを木  
理も見ごとく後世得ざるま箏をまどかく鳴らてハ何ハせん  
とそ床へぬ芦菴あつていつくさへいふ小元よき箏ありまこ  
手城入まをバ鳴りあへ其時をく悔まのひぞとて家負き  
中より金五両城出して買求つ箏の上下の裡の穴より砥

石を甲の裏城磨り十日の間ひまなくまらて緒城うけて  
弾試る小果して絶妙の音城發し勝まざる名器とありぬ  
皆人感し羨まらるゝ小或日中島道成来りくこの箏城  
出して弾む道成をそとあを羨しき箏城所持しあ  
まのこまといふ芦菴少くも何く心小なるまをまきあや  
問入道成何のこま(ま)やといふ実小まらば此箏城君小奉  
まを失禮ハゆるまを程の上手小良箏一面をたく  
まを恨まらば贈り申ありといふ道成を思ひつゆて再三  
辞きくをその志の厚らうハ悦びてまをひけ其目  
まを推乃て帰らまをありとぞ



又ある時門人の富家なる者各番ありし示すとて  
 人の妻の富の草葉よをく露の風城まのるの光りありたり  
 まる一日の方へ行てさる途とちう中より輿うご城やひて家よ  
 うり輶夫こびとよ賃ちん城あとさる小錢の三女ありさる隣舎りんや  
 小乞こひし折節その家よをなるとれが三女のつくのひよとて  
 よとてとらるる

津の玉のちよののを波とさるをたふさるる  
 又ある夜盗人ぬせび来りてさるひる翁と知りて大とち出さる  
 を盗人共え入てさるぬその翌夜あつよよさるるさるる  
 さるるるさるるさるるさるるさるる

あつを海の出石いせなるるるるるるるるるるる  
 まる四條戯場しやうばよ韓信かんしんの故事こじ城じやう引く伎藝ぎぎのまよて薑菴きやうさう  
 うるるる

末つひ小海とあるさるるるるるるるるるる  
 とよあるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 む隠士学丹いんしがくたんとさるるるるるるるるるるるるるるるる  
 小かさるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる  
 小薑菴きやうさうありといひつるるるるるるるるるるるるるるるる  
 かん芦菴あしやうの歌よ名高なかつたるるるるるるるるるるるるるるるる  
 回祿くわいろくの後太秦ふかまつの地藏堂じやうじやうだうよ假居かりせりその時  
 禁裡きんり炎えんよ



今朝とまき焼の原とありふらうらや昔の玉き乃庭  
頼山陽杜詩以夔州為上乘の條に蓋菴翁和歌為當  
代第一而其避災寓太秦時稱最深妙故太秦者蓋  
菴之夔州也と芦菴公老杜に比しことさもあまき

ゆくまきともの秋草をどうもては城住所とさむまは  
いよよ紙うらまき人ふありをそ初雪のよそふこそきん

初花のころ近きわらひ見ふ初雪やといふ

時をぬ寒さふ光ひうらうちさき花もあひまは

うら

かりふきを過えやまきんらうら野の昔のいそ垣根を

朝雪

山陰の祢々紙出る朝雪のつまきんを木このあき雪  
近世京師を地下和歌四天王と称するハ澄月蓋菴慈延  
蒿溪を各和歌の風躰に異し一様をさむ澄月ハ老  
輩めて先達を芦菴ハ才氣秀發古躰今躰自由りて  
詠歌の上手此人の上ふつる者あり大愚ハ清新况味詠  
て歌学ハ漢学紙兼備も実ハ此道の宗匠あり蒿溪ハ  
澹泊紙專一あり言外の餘情紙志ハ高上の風躰あり又  
和歌よくして近世の達人ありとぞ

橘春暉説

僧涌蓮の逸事



崎人傳小涌蓮の傳は載さるるといども、小奇事はきくも  
 その大槩は載せしむる時茶人某の招きまゐる小涌蓮は愚  
 僧小茶はこゝのまゐりてさきよ行ざり、小再應ふ及び、  
 遂小まゐりて招ふ應じ行ざり、小田小入りて志ばり  
 坐し居り、小主人婦と用事出来て、跡めて涌蓮  
 爐邊小あふのころをち茶入はと見て居るまゝ、  
 小あや、とりんふと取り落し、器は共小少、焼爛  
 一、小主人来りて大、小真、高價をて得多、珍器乃  
 かく損ぜ、をいむ、氣色面色小あつ、法師の氣の  
 毒もや思ひ、黙然と居らま、主人を其座乃不

興あるは愧り、人色は直、内あや、是非を、何  
 卒和歌一首よそ添らま、向ひま、とひさき、ふとひ  
 ま、漸、ころあちつき、志、ま、と、葉  
 とりて

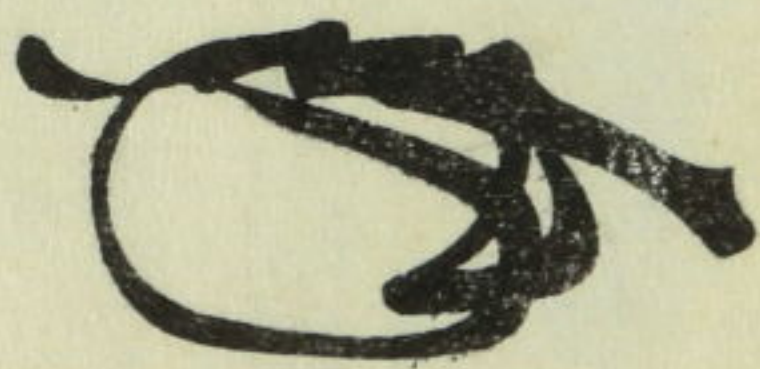
伊勢の海の浪士の翁の志、とて、浦小、つ、を、  
 と書て志、主人を大、小、よ、ら、び、是、あ、そ、此、茶、入  
 の、一、奇、事、と、こ、そ、あ、り、あ、ま、と、て、大、小、真、小、入、り、て、其、日、は、終、り  
 ぬ、と、ぞ、その、後、此、器、の、あ、り、小、よ、り、若、干、の、こ、ろ、祢、小、あ、ら、ま、  
 某、侯、の、法、院、と、ハ、あ、り、あ、ま、と、ぞ、又、遁、世、と、時、の、歌、を、  
 人、を、小、墨、乃、衣、ハ、き、ま、ぞ、を、こ、も、合、祢、を、ぬ、き、ま、て、小、り



是八涌蓮觸骸の贅真跡あり  
此歌既小野人傳小載也

雲煙室藏

新  
ふ  
あ  
ら  
う  
ま  
い



ふ  
ら  
は  
い

ふ  
ら  
は  
い

ふ  
ら  
は  
い

ふ  
ら  
は  
い

ふ  
ら  
は  
い



荷景縮寫

人るみよまのさ



さつらうきりしあま

かきしりしあま

かき



中村家藏

まゝの巾衣ふあゝゝ色一時のこゝとて

人あゝふ墨の衣ふきりりりまゝたあふらゝとをわ

又山居春曙とりし題あて

うねあふらゝとゝと住山ふこあふとそ春のあぢの

勝間龍水の傳

龍水名ハ定安新泉と号を業成池永道雲ふ受てまゝ

篆刻成餘事とま江戸新和泉町ふ居住して父ハ町役成

勤む其後成繼て傍ら幼童筆道指南成業とんまゝ常ふ

畫事誹諧ををあせり海の幸山の幸と云画本ありまゝ

古章印譜二冊あり寛延寶曆の間府内ふ其名高し



又そのころ高名ある俳優市川徳齋三升を初として西  
 三輩此門子あり常小財はむさがる心ありて極て貧  
 窮ありしもの門弟餘分の束脩あまはば必返返すに至る  
 まゝ困窮ある者の子小筆墨をとりて買ひむること  
 まくあり又その支配する者大長屋よりて裏屋百軒餘  
 ありといふを其役徳は貪ることさしふあり又手跡稽古  
 の子供数多ありまば二階下共小紙屑むびむり紙屑屋  
 ふりて汝困窮の渡世何ぞ屑を遣はす代物ふ及ぶん  
 やとて是又さし受む萬事この如くありまば衣類とて  
 を自由を得む金錢あること稀あり或時四月初旬の比

老母女房をとも佛系一たる田守ありしが初松魚を  
 賣り来る聲はきくや否や持てる筆をえ捨てそらふ  
 よび入きて買得しが家内小代錢はあつてはあつりまば  
 せんまぶあく婦人等の信仰あり一向宗の持佛堂小三道  
 具のきよらふ餅りある紙取ごりまぶ小隣町ある仕廻  
 物屋の通りうらうらあるを呼て賣拂その錢をて輕の價  
 紙つくのひ近邊の朋友平砂百菴乾什買明をて紙招き  
 て大酒宴紙すらす数皿多ぐりし家内の者ゆりて  
 大ひ小敬馬き三ツ道具の何しむる紙うららむる龍水云々  
 そまぶ初松魚小變どりしを南無不可思議光その方



ども今日佛系してありとと思ふ即極樂日まも  
 朋友と共ふ會してよろこびのむ愛即如来ありとて  
 少えころふけむ談笑自若りとぞ又寶曆六年杉森  
 稻荷の幟を新製し書紙とてまきふ龍水氣をす  
 ぐまきざることありて間ふ合ぎまば詮方なく其子息小属  
 て書せたり書ありて父小問て名字紙何と書やと  
 つひらまば龍水谷て堺町能優等あや方の名紙請つぎて  
 名乗るが時花物あり又釣鐘の子をす鐘とこの子を風  
 鈴と云汝ハ龍水子ありまば蛇水とありとて書る一とて  
 そまきより杉森の幟ハ蛇水が筆ありとて諸人大ひ小称美

まことそのころの物ごころあり

寶曆の昔と今日とハ僅ふ八十年ばかり紙魚ぐる龍水が性  
 質謙遜ありて和藻の文人を評せし俳優の言語釣鐘  
 の類小比況しること又幟を書き程の腕紙まて未ご  
 別号紙立ざるをむと古人の淳厚うくの如し

梅里山人の逸事

山人姓陶名酉字冲己号中郷橋邊人江戸本所中之郷  
 小住を法尾師某あり温潤ありて世事小かこむと杜年の  
 ころより家事紙子息小任せて其家のころころ小閑居し  
 常小畫事紙ころころ山水洒落花卉翎毛各逸趣あり



又山水中小自ら題辭せるものあり時々墨水の邊小出で  
釣紙垂て月夜家小歸ること紙目をも詩賦を吟じて  
自ら閑適紙甘んじ又平生他行せざるごと小家紙鎖をこと  
ありある時盜人入りて鍋釜のこひを持行る紙るや小  
住婦人是を見つらたるあり婦人山人をゆり来りたまはる小  
其由紙告て何を見多ま盗人何まといひいふ山人是を  
見あるは自ら若くしてよしとてそのまをたてあたる其後  
猶鎖をことあり又常小画紙寫して人小ありよといふを  
決して潤筆を求ること紙のまは自ら隱居の扶持紙  
えて足まりといひある人畫紙をよとあり金二百足紙包て

潤筆小あくる山人辭してけむ畫ありて後まことむむと  
之共いありゆるきん故小止事紙得むひそく小机上り  
置て物るその後三月程歴てまこと訪ふことある小其ま  
机上小ありてそその澹泊なるまより画を又あつる  
超元ありり

白石先生の書再収奇遇の事

予が本舗の主人玉巖寛政享和の以を不新寺町慶元書  
堂小ありて少壯あり一時四谷邊小事ありて通行せり折  
りある紙屑屋小紙屑のづら多く積みありしが婦人故紙  
の袖小さらるるものあり何心を引出しひき見まば小箋小



白石先生の楷書自作南天燭芭蕉自鳴鐘の詩三首紙寫  
 せしものありさる共真贋のことハ知るべきやうあるまじく至て  
 低價紙出してこそ紙予ふくまじくまじくといひまじく小屑屋  
 元よりあるまじくことあるまじく一紙の反古ところ得さう小鶯眼  
 小及びんとせし紙志ありて置て去まじくやうて家小物りて  
 後北山篁墩あるの先生小示せし小是ぞ真跡こと小奇絶の  
 書法ありと各讚賞せし玉巖くふく大ひ小よりこび  
 天の賜ありとて珍物ある紙朋友小玩月と号して書生を  
 書肆ある者あり是又慶元堂小同居し直紙以て懇小渴  
 望せしとて玉巖ゆるさば元より沽さるるものとす由（小他

行のあり紙窺ひ箱の中より其書紙さぐりてて價金四兩と  
 入き壺より其後玉巖此書紙出し見んとせし小白石紙金小  
 あり者ハ玩月とて封金ある紙見て大ひ小驚き玩月乃  
 物も紙待早速元のごとく書小之んこと紙ひくどどもの少も  
 肯いむまや已小他（沽却せしあるまじく物さきやうありとて只  
 黙して言葉あるまじく是非あるそのまをおまじくぬ玉巖主  
 人を此白石翁の詩紙得しより古書紙好むの端とハあるまじく  
 より老年小あまひて折こかこらまじたりき其後追々好事  
 の心深まあまひて猶白石の書の志念やまじく朋友と書画乃  
 話小及ハ必しひ出せし程のりあり其後三十年紙歷玉巖



晩年ふ及び——予を白石先生の書紙得——とあるふ  
 小措めし詩の様常ふ耳ふ孰せし夏の夕のふ髣髴し  
 贗ふ何しぎまきニツ有べきやう果して此書をんとおまひ  
 即時ふ玉巖の居るが紙伺ひ机上ふ載置て物りぬ玉巖  
 帰り来りてこそ紙見しふ常々思念ふ堪ざる夏の白石の  
 書紙そののまをてありし愕然として驚き夢幻のこも  
 してやまらありふ是ハ雲煙がかくものつるなるべし即時  
 使して呼まし——予即ちゆきて手ふ入——由紙述——お是ぞ  
 ことの常々そのぐる夏の夕の夕の今再び見ることふとたひふ  
 喜び價ちふ程もそむらひ——と云ひま——予もいづく

直紙取るべきや実ふそまをふ優曇花の再會と云ふのまを  
 よろこぶふ堪らうこそまハのまふまあせんとて贈り——此書  
 ことの為ふ千金をわく——とよろこぶまをよりまを玉巖堂  
 の紙花とハをまより千歳の紙墨の今ふ折く出る紙見るハ奇と  
 まるふ多うまをまを人せ一代ふ一紙のそのまをて——ふ失ひ又  
 数十年紙経て再びこそ紙得るくる奇講のあはく首ぎや  
 是韓退之が畫の記の感嘆と同日の談をう——玉巖老人此  
 奇講紙よろこぶのゆまう宅山先生ふ跋文紙をい——が紙を  
 して世紙去りぬ先生をその秋姫路侯ふ随逐せしま都下  
 ふあはさう——故ふつまを稿紙結ぶふ及びぐる事ときこゆ



熊澤伯繼藤樹先生小謁張請事 并真跡短冊

藤樹年譜小元和八年辛巳先生三十四歲此冬熊澤伯繼  
來て業張受く去秋始て來て入張して謁張請る先生その志  
の真偽張志る故小固く是張辞をも小請てやまは先生書  
張以て是張辞をも小猶請て曰たは小教小與らむといふ共い  
て及拜謁する事張許さるると其情甚愁て涙張滴る小至る  
先生其情状張聞知して是張憐む謁する事張許を張  
業張受る事張許さる強て帰るむ冬又來て固く請てま  
此小於て終小業張授く云々其餘傳記諸書小出張て姑置  
る小我友信州人市川信壽其墨跡の短冊張花を珍故る小摸出

# 綱代

綱代木

日遠遍

耳以左与婦浪毛水羅之

天仿由留宇治乃河風中江原



まゝ先生の末孫中江久風の物語り小態澤氏始て藤樹先生よまゝ入門の時了芥よめる

こゝろの系る社小神ハナリこゝろの内小神と傳まゝと無城ひといひまゝ一まゝ後樹先生

小振神の社八月をまゝまゝ系るこゝろのまゝと有城まゝつて答まゝとあり藤樹と了芥と師弟まゝと元後小その学風まゝの異なることまゝより歎然まゝなり

仁齋先生櫻隱の號 附梨本翁

伊藤仁齋先生棠隱の別号あり八世人の知るまゝと櫻隱と号まゝことあり其故ハ古学まゝ和歌集小菴室の前

小櫻城植て侍り一まゝ年城経て花のさうりありまゝ

幸の中城まゝとありまゝのつゝ櫻本のかまき家まゝの庭

此以戸田茂睡此人の傳卷 四小詳あり住菴城世の人のかれ家といひ城まゝて

人まゝまぬ身まゝよまゝひまゝのつゝまゝをまゝひまゝをまゝひまゝをまゝひまゝ

又菴の前小山梨の木ありまゝ

のまゝままくま福世まぬり果ま一ま老の身ま隱ままま任まぎま山梨まのま

是より後睡小梨本乃号あり是住所ハ江戸まにて同時の人あり歌まと其意まなりま箇合ませることまありま一ま仁齋先生の

真跡ま和歌を摸寫ましてま小載せり



池水多佳趣

松立不似此其心空以之

甚如——子多子かく

斗不陸字の亦子

維楨

信州佐藤昌也藏

大石良雄二武畫讚并子息童名

附清人四十七士の義烈紙称誉まゝ事

大石氏の画小巧あるハ世の知るところ更ふ云ふ及び近き以  
它山先生のその公小姫路小陪随せしき一次に赤穂小遊  
ばき佐古志浦の奥藤氏小邀一らき四五日其家小淹留せし  
る良雄氏の遺墨紙多し貯一花多し一らふ二武画讚と云



その所の二枚をりの屏風の如き帖あり右の図八源廷尉義経城真の着色をて画き鎧仕立と云甲冑をて林几小倚り左手小弓城より右小軍扇城持ち黒地小日輪城朱をて出き一あり其讚小曰

源義経者頼朝秀弟也。季秀恐戰則勝之。攻則取之。本朝古采誤無出其右者。可謂暗合孫吳壓倒韓白也。其事跡載在口碑。

左八武田入道信玄より是を軍装をて共甲冑八粗悪に左手小料紙城持右小八筆城搦る像あり讚小曰

武田信玄者初名晴信。新羅三郎之後也。勇而用

兵。破義清長時。而領其邑。與氏康信長相戰。而爭其地。世多稱其謀畧。長尾輝帛其敵手也。

其手札八楷法瘦樸をて共画法の功力ありふ八及ひぐととぞ此ある氏八この地の舊族あて世々大在家酒城餘業を

藩士より往復の書牘のうち彼義士の書簡城集を一軸を

浪華竹山公羽の跋文あり其文中小云淺野家士復雙の跡城琉球人の清朝小到り一その事城談む城清人耳

城傾々て是城きて其義烈城感一一座泣りうざるそのありと大島筆記と云書小見之うりとなり

海外奇談と題する三卷あり赤穂義士の事城忠臣庫と小説文記せ



富森助右衛門八書を佐玄龍小学びて其風法能き三社宅宜或神号法  
見ることあり又阿州佐藤氏小青土佐屏風法書と一法所藏せり

雲煙縮寫

蘊滿空因狂天福

富森華龍敬書

富森華龍敬書

大石良雄畫



小室道徳寫  
真  
禱

雲煙室藏



一城清人の改竄せしむと云ふも恐らくハ  
妄作あり一程春臺の産語の類もんを

良雄の長男城主税と稱するハ誰ぞ知る是ハ退轉の没元服  
城加一之を改名一名あり初ハ松之丞と云赤穂没落乃  
後父と共に京師山科の西山小僑居の日其所より菊屋赤穂乃  
城地の名  
ある前川某小贈る書の封皮真後氏小遺り存ま大石主税  
と傍小松之丞事と注右ハ先生の摘註小記赤穂乃  
紀行の城抄出せ

赤穂義士閑居替名 并大高去より發句

赤穂義士各閑居の時城州伏見蛭子町の青楼小光陰送る  
其間戲文笹屋清有あるの所持一紙此五祇園町之披  
露うら一なるより

大石良雄 うき 大高原吾 まより 小野寺幸有 ありん

小野寺十内 まけ 中村勘助 あり 富森助右衛門 まけ

村松三太夫 えま 潮田又之丞 あり 勝田新左衛門 せう

右何をも假名状して文ハ女子の如く又良雄天井板小書捨  
城彼笹屋板を取りくづして屏風の如く小仕立あり其詞小云

今日亦逢遊君。空過光陰。明日如何。可憐。恐君急  
拂袖歸後。世人久不許逗留。不過二夜者也。

又大高原吾時の遊女の名城頭小きて屏風小書

夕霧や人まる窓の薄阿のり利 まより  
芳野いり小白い小袖ハ山さくくら



高橋や多しと云乃夕まをみ  
風よほる雨の袂や阿の川き  
初音とや一番たそひの郭公

近世名家書画談二編卷之三畢



